

Journal of Chubu University Education

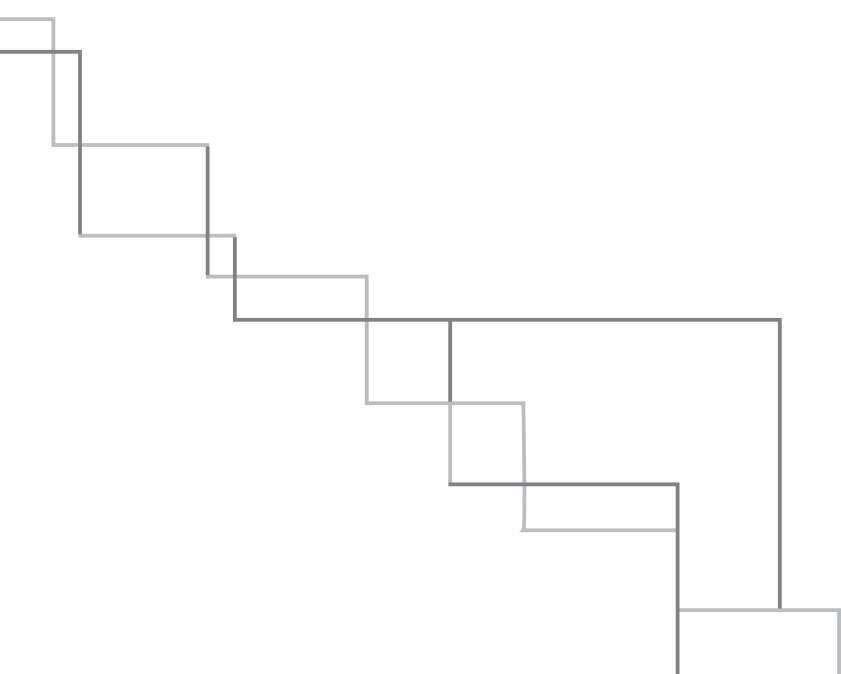
No. 20
2020

【実践研究・実践報告】

2019年度の全学英語教育に関する報告 大門正幸・今村洋美
加藤由崇・西村 智
野田恵剛・和田珠実

【Practical Reports】

A Report on English Education in 2019
..... OHKADO Masayuki, IMAMURA Hiromi,
KATO Yoshitaka, NISHIMURA Satoshi,
NODA Keigo, and WADA Tamami



2019年度の全学英語教育に関する報告

大門 正幸^{*1}・今村 洋美^{*1}・加藤 由崇^{*2}・西村 智^{*1}・野田 恵剛^{*1}・和田 珠実^{*3}

要 旨

全学英語教育科（現人間力創成総合教育センター・語学教育プログラム）では、2011年度から7年間にわたって実施してきた共通テストを2018年に改訂し、その検証結果を大門他（2019）で報告した。そこでは、(i)「零点」の受験者がなくなったこと（初級、中級）、(ii)得点のばらつきが減ったこと（標準偏差の値の減少）、(iii)読解方略に関する問題と文法に関する問題の平均の差が近接するようになったこと（特に初級）を改善点として報告したが、本稿では2019年度においても同様の結果が見られたかに焦点を当てて、2019年度の全学英語教育に関する報告を行いたい。

キーワード

英語教育、到達度確認テスト、フレッシュマンテスト、実力テスト

1 はじめに

2011年度の全学共通教育のカリキュラム改訂以来、全学英語教育科（現人間力創成総合教育センター・語学教育プログラム）では全学共通教育科目のスキル教育科目として「英語スキルⅠ／Ⅱ」¹⁾を実施し、その成果や課題について検討すると同時に、その成果を本誌や学会等で発表してきた（大門他，2010；2011；2012；2014；2015；2016、和田他，2013、Imamura et al., 2019、Wada et al., 2014）。2017年度には到達度確認テスト（共通テスト）の改訂を行い、翌2018年度からは改訂版を用いて授業を行っており、その結果については大門他（2019）で報告した。

本稿では、2019年度の到達度確認テストの結果について検討し、2018年度に見られた改善点が概ね確認できたことを示したい。

2 授業の概略と到達度確認テスト

「英語スキルⅠ／Ⅱ」の受講生は、入学時に行われるフレッシュマンテストの成績によって、上級、中級、初級の3つのレベルに分けられる。教科書および教材は全学英語教育科（現語学教育プログラム）の教育方針に沿ったものである。2011年度と2012年度には既存の教科書を、2013年度からは独自に作成した教科書を使用している。

当初から、学習の到達度を測るために、各学期の最後に、(i) 読解方略（リーディング・ストラテジー）に関する問題、(ii) 文法に関する問題、(iii) 語彙に

関する問題、の設問からなる到達度確認テストを実施してきたが、2017年度に改訂を行い、(iii)を秋学期に独立して行う語彙テストとして実施し、各学期の最後に行う到達度確認テストは(i) 読解方略に関する問題と(ii) 文法に関する問題に限定した。また、その内容についても、より応用力を測る問題に改訂した。（大門他，2019参照）。

さらに、秋学期には授業内容とは独立した実力テストを実施し、フレッシュマンテストの成績と比較することで、英語力の変化の確認を行っている。

以下、3節では、到達度確認テストの結果について、4節では、語彙テストの結果について報告する。5節では、フレッシュマンテストと実力テストの結果および到達度確認テストの結果との相関について報告する。6節では、単位の修得に至らなかった受講生についての報告を行う。

3 改訂版到達度確認テストの結果

3.1 春学期

レベル毎の到達度確認テストの結果を表1から表3に示す。有効数は初級が156（2018年度は221）、中級が1731（2018年度は1663）、上級が272（2018年度は233）であった。表の一行目における「春方略」「春文法」の部分は改訂版の到達度確認テストにおける「読解方略問題」および「文法問題」を、またその後の「19」「18」は、それぞれ「2019年度」「2018年度」を指す。2018年度の数値は、大門他（2019）で報告した

*1 人間力創成総合教育センター 語学教育プログラム 教授
*3 人間力創成総合教育センター 語学教育プログラム 准教授

*2 人間力創成総合教育センター 語学教育プログラム 講師

ものである。また、数値は全て100点満点に換算してある。

なお、分析に用いたのは、SPSS Statistics 24 (Mac OS X版) である。

表1 春学期の到達度確認テストの結果 (初級)

	春方略 19	春方略 18	春文法 19	春文法 18
平均	62.8	59.2	47.9	55.3
中央値	65.0	58.3	50.0	55.0
最頻値	65	67	35	55
標準偏差	14.0	19.1	16.9	21.1
最小値	25	8	10	10
最大値	95	100	95	100

表2 春学期の到達度確認テストの結果 (中級)

	春方略 19	春方略 18	春文法 19	春文法 18
平均	77.9	76.6	69.0	73.5
中央値	80.0	75.0	70.0	75.0
最頻値	85	83	85	70
標準偏差	12.7	15.5	17.3	15.7
最小値	20	17	0	15
最大値	100	100	100	100

表3 春学期の到達度確認テストの結果 (上級)

	春方略 19	春方略 18	春文法 19	春文法 18
平均	89.4	89.2	86.6	87.4
中央値	90.0	91.7	90.0	90.0
最頻値	95	92	95	95
標準偏差	7.4	9.1	9.4	9.2
最小値	70	67	50	60
最大値	100	100	100	100

大門他 (2019) で報告したように、改訂版のテストでは (i) 「零点」の受験者がなくなった (初級、中級)、(ii) 得点のばらつきが減った (標準偏差の値の減少)、(iii) 読解方略に関する問題と文法に関する問題の平均の差が近接するようになった (特に初級) という改善点が見られた。最初の二つについては、今回のテストにおいても概ね踏襲されていると言える。すなわち、(i) 「零点」の受験者は中級の文法問題に限定されており、(ii) 標準偏差の値も、上級の文法問題以外では小さいままである (むしろ2018年度より小さくなっている)。しかし、読解方略に関する問題と文法に関する問題の平均の差については、初級で14.9点 (62.8点-47.9点)、中級で8.9点 (77.9点-69.0点) と大きく開いてしまっており、その理由は不明であるが、今後注視する必要がある。

3.2 秋学期

次に秋学期の到達度確認テストの結果を表4から表6に示す。有効数は初級が152 (2018年度は176)、中級が1694 (2018年度は1629)、上級が262 (2018年度は232) であった。数値は全て100点満点に換算したものである。

表4 秋学期の到達度確認テストの結果 (初級)

	秋方略 19	秋方略 18	秋文法 19	秋文法 18
平均	45.5	46.2	45.9	46.3
中央値	45.0	45.0	45.0	45.0
最頻値	50	45	65	40
標準偏差	14.6	15.9	19.7	21.6
最小値	15	0	10	0
最大値	100	100	100	100

表5 秋学期の到達度確認テストの結果 (中級)

	秋方略 19	秋方略 18	秋文法 19	秋文法 18
平均	61.7	61.9	65.8	65.8
中央値	65.0	65.0	70.0	70.0
最頻値	70	70	70	80
標準偏差	16.2	15.7	20.6	21.3
最小値	5	0	0	0
最大値	100	100	100	100

表6 秋学期の到達度確認テストの結果 (上級)

	秋方略 19	秋方略 18	秋文法 19	秋文法 18
平均	77.2	76.7	88.0	86.3
中央値	75.0	80.0	90.0	90.0
最頻値	75	80	90	90
標準偏差	8.7	8.2	9.6	11.4
最小値	50	45	55	15
最大値	100	100	100	100

春学期よりも全体的に得点が低めなのは、秋学期の問題には春学期の既習内容も含まれるため難易度が上がるからだと考えられる。

2018年度に見られた改訂版のテストにおける改善点は、春学期に見られた三つの改善点のうちの二つ目と三つ目であったが、この傾向は2019年度にも見られ、旧版と比べた場合の改訂版の有効性が確認されたと考えるであろう。

4 語彙テストの結果

2018年度より実施をはじめた語彙テストの結果を表7から表9に示す。有効数は初級151 (2018年度は219)、中級1687 (2018年度は1657)、上級262 (2018年度は230) であった。

表7 語彙テストの結果（初級）

	語彙 2019	語彙 2018
平均	61.9	62.2
中央値	60.0	60.0
最頻値	73	57
標準偏差	20.3	22.4
最小値	20	0
最大値	100	100

表8 語彙テストの結果（中級）

	語彙 2019	語彙 2018
平均	79.0	79.9
中央値	83.4	86.7
最頻値	97	97
標準偏差	17.7	17.7
最小値	13	17
最大値	100	100

表9 語彙テストの結果（上級）

	語彙 2019	語彙 2018
平均	92.6	91.4
中央値	93.4	93.4
最頻値	97	97
標準偏差	6.9	7.8
最小値	70	57
最大値	100	100

初級における若干の平均値の減少（62.2から61.9へ）や最頻値の上昇（57から73へ）、標準偏差の減少（22.4から20.3へ）、最小値の上昇（0から20へ）、中級における平均値の若干の減少（79.9から79.0へ）、中央値の減少（86.7から83.4へ）、最小値の減少（17から13へ）、上級における平均値の上昇（91.4から92.6へ）や標準偏差の減少（7.8から6.9へ）、最小値の上昇（57から70へ）、といった違いはあるものの、大きな違いは見られないと言ってよいであろう。

5 フレッシュマンテスト・実力テストの結果および、到達度確認テスト・語彙テストの結果との相関

新入生は入学時に全員フレッシュマンテストを受けるが、一年次の秋学期、11月末か12月初旬に、二年次のクラス分けの参考資料として、また、入学時からの英語力の変化を測るために、実力テストを受けることになっている²⁾。このテストは、フレッシュマンテストと比較可能な内容であるため、両テストの得点は、受講生の実力の伸長を知る参考資料として用いることが可能である。2019年度の両テストの結果のヒストグ

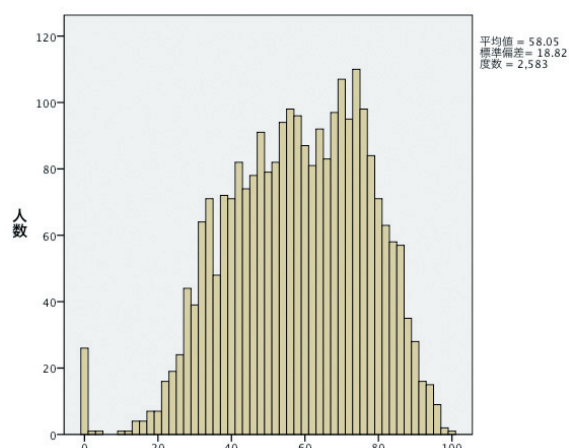


図1 フレッシュマンテストの結果

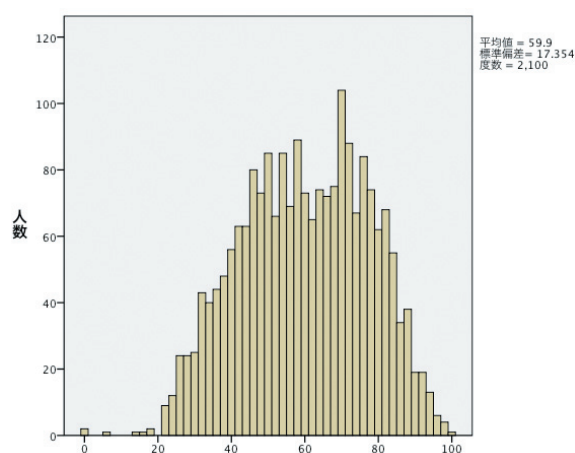


図2 実力テストの結果

ラムを図1と図2に示す。

二つのテストに関する2018年度の改善点は、2011年度以来はじめて両テストの差が統計的に有意になったことであった（大門他, 2019, p.4）。2019年度の結果についても、wilcoxonの符号付き順位和検定を用いて分析したところ³⁾、.05の水準で有意であり、2018年度と同様の傾向が見られた。

次に、フレッシュマンテストおよび実力テストの結果と、到達度確認テストの結果との相関を見てみよう。

より実力が反映されることを意図して行われた到達度確認テストの改訂であったが、その意図通り、2018年度においては、2017年度以前と比べ、到達度確認テストの結果とフレッシュマンテストおよび実力テストの結果の相関は高かった（大門他, 2019, p.4）。Spearmanの順位相関係数で見てみたところ、表10に示すように、2019年度も同様の傾向が見られ、改訂版の到達度確認テストがより実力を反映したものになっていることが確認できた（表10におけるカッコ内の数値は2018年度のもの）。

表10 フレッシュマンテスト／実力テストと
到達度確認テストとの相関

	フレッシュマン	実力
春の「方略」	.628** (.532**)	.632** (.561**)
春の「文法」	.711** (.556**)	.715** (.612**)
秋の「方略」	.683** (.650**)	.685** (.700**)
秋の「文法」	.674** (.654**)	.677** (.706**)
語彙	.579** (.528**)	.573** (.572**)

** $p < .01$.

6 単位が修得できない理由

最後に、履修登録をしたにも関わらず単位の修得に至らなかった受講生について分析しておきたい。

毎授業の学習の積み重ねを重視する「英語スキルⅠ／Ⅱ」では、理由なく欠席が3回を超えた場合、つまり4回以上欠席した場合、特別な理由のない限り不可と判断することになっている。つまり15回の授業のうち最低でも12回(80%)の出席が要求される。表11に示すように、成績と出席率にははっきりした関係があり、春学期と秋学期のいずれにおいても単位を修得できなかった学生の出席率は極めて低い。

表11 成績と平均出席率

	S	A	B	C	E
春	97.8% (N=373)	97.2% (N=661)	95.8% (N=648)	93.7% (N=426)	67.6% (N=117)
秋	96.2% (N=233)	95.3% (N=640)	93.5% (N=650)	91.5% (N=538)	63.7% (N=138)

単位未修得者(E評価)について言えば、春学期は60名(51.3%)、秋学期は76名(55.1%)が規定の出席率を満たしておらず、そのため自動的に不可になったと考えられる。

この傾向は再履修生ではより顕著であり、表12に示すように、単位を落とした再履修生の出席率の平均は4割に満たない。規定の出席率を満たさず自動的に不可になったと考えられる受講生の数は、春学期34名(79.1%)、秋学期54名(91.5%)である。

表12 成績と平均出席率(再履修生)

	S	A	B	C	E
春	96.1% (N=12)	92.0% (N=20)	87.9% (N=21)	81.8% (N=47)	20.3% (N=22)
秋	90.4% (N=9)	87.9% (N=16)	85.9% (N=34)	84.4% (N=53)	19.4% (N=43)

授業に魅力を感じず出席率が低くなった可能性は否

定できないが、履修登録後1度も出席していない受講生もいる。その数は、通常の履修生では春学期、秋学期それぞれ1名(N=2,225, 0.4%)と4名(N=2,199, 0.2%)、再履修生では春学期、秋学期それぞれ8名(N=122, 6.6%)および15名(N=155, 9.7%)である。

単位を修得できない受講生の出席率の低さは過去からずっと続いている問題であるが、2019年度も同じ傾向が見られた。この問題については、やはり、オリエンテーションや指導教授制を利用したきめ細かい対応など、抜本的な対策が必要であろう。

7 結語

以上、本稿では2018年度から実施を開始した改訂版の共通テスト(到達度確認テストおよび語彙テスト)を中心に2019年度の全学向け英語教育に関する報告を行った。2018年度に見られた改善点は、概ね2019年度でも確認された。

一方、単位の修得に至らなかった受講生についても検討したところ、これまで同様、出席率が大きな問題であり、抜本的な対策が必要であることが明らかにされた。

今後もデータ収集、分析、検討を重ねて、より良い教育体制の構築を目指していきたい。

謝辞

教育方針の策定、各種テストの実施、その他の運営面でご協力くださった先生方、本報告の内容に関して貴重なコメントを下された先生方に厚くお礼申し上げます。

注

- 1)「英語スキルⅠ／Ⅱ」は旧カリキュラムの「フレッシュマン英語A／B」に対応している。
- 2)「実力テスト」は、2012年度までは「ブレースメントテスト」と呼ばれていた。
- 3)非正規分布をなしていたため、ノンパラメトリックな検定を行った。

参考文献

- 大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明(2010)「大学英語教育に関する基本方針についてー専門教育機関としての大学における英語教育の在り方を巡ってー」『中部大学教育研究』10, 23-28.
- 大門正幸・柳朋宏・西村智・野田恵剛・山田伸明(2011)「全学英語教育に関する中間報告」『中部大学教育研究』11, 87-94.
- 大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明・

柳朋宏（2012）「平成23年度秋学期の全学英語教育に関する報告」『中部大学教育研究』12, 81-89.
大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明・和田珠実（2014）「平成25年度の全学英語教育に関する報告」『中部大学教育研究』14, 29-37.
大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明・和田珠実（2015）「平成26年度の全学英語教育に関する報告」『中部大学教育研究』15, 65-74.
大門正幸・今村洋美・加藤由崇・西村智・野田恵剛・和田珠実（2016）「平成27年度の全学英語教育に関する報告」『中部大学教育研究』16, 89-97.
大門正幸・今村洋美・加藤由崇・西村智・野田恵剛・和田珠実（2017）「平成28年度の全学英語教育に関する報告」『中部大学教育研究』17, 35-44.
大門正幸・今村洋美・加藤由崇・西村智・野田恵剛・和田珠実（2018）「2011年度?2017年度の全学英語教育に関するまとめ」『中部大学教育研究』18, 1-6.
大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・和田珠実（2019）「2018年度の全学英語教育に関する報告」

『中部大学教育研究』19, 1-7.
和田珠実・大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明（2013）「平成24年度の全学英語教育報告」『中部大学教育研究』13, 79-85.
和田珠実・今村洋美・大門正幸（2013）「中部大学におけるEGAPを意識した全学英語教育カリキュラム改革」大学英語教育学会第52回国際大会（於京都大学）での口頭発表.
Imamura, Hiromi; Wada, Tamami; Ohkado, Masayuki (2019) “Utilizing a Tailor-made Textbook Focusing on EGAP at a Japanese University,” poster presentation at JACET Seminar 2019, Tamagawa University, Japan.
Wada, Tamami; Imamura, Hiromi; Ohkado, Masayuki; and Laurence, David (2014) “An English Education Curriculum Reform Focusing on EGAP at a Japanese University,” oral paper at AILA World Congress 2014, Brisbane, Australia.

A Report on English Education in 2019

OHKADO Masayuki^{*1}, IMAMURA Hiromi^{*1}, KATO Yoshitaka^{*2},
NISHIMURA Satoshi^{*1}, NODA Keigo^{*1}, and WADA Tamami^{*3}

*1 Professor, Language Program, Global Education Center, Chubu University

*2 Senior Assistant Professor, Language Program, Global Education Center, Chubu University

*3 Associate Professor, Language Program, Global Education Center, Chubu University

Abstract

In 2017, Language Education Program, Global Education Center, revised the achievement test which had been used for seven years to measure students' achievements in the "English Skill" classes and started to use the new version from 2018. In this article, we report the results of the English education in 2019, with special reference to the results of the new achievement test in comparison with those reported in the previous year.

Key words

English Education, Achievement Test, Freshman Test, Proficiency Test